

琵琶湖・淀川流域再生の最前線

本部・湿地・沿岸域研究委員会共同企画

日本最大の湖である琵琶湖は、現在の湖が成立してから40数万年、古琵琶湖を含めると約400万年の歴史を有する古代湖であり、多様な生態系を育ててきた。琵琶湖では、富栄養化の指標とされる透明度やクロロフィル量は北湖・南湖とも長期的に減少しており、湖の富栄養化はほぼストップしたと考えられている。一方で、2006年に発行された滋賀県版レッドデータブックでは、琵琶湖固有種の62%、固有魚類では73%もの種が絶滅危惧種、絶滅危機増大種、希少種に指定される等、水質が改善されたにも関わらず、琵琶湖の生物多様性は危機的状況にあるといえる。

本部・沿岸・湿地研究委員会では、下流域1,400万人の命を育む琵琶湖における生物多様性保全の現状をより深く学ぶとともに、管理者側における最先端の事業内容に関する講演会を開催した。以下に各講演の概要を示す。生物多様性からみた琵琶湖・淀川水系

(滋賀県・琵琶湖環境科学研究センター 西野麻知子氏)

それぞれの流域で、地形改変の歴史、土地利用の実態、地域住民の関わりのある方や程度は様々であるため、失われつつある生物多様性を取り戻すには、それぞれの地域でどのような要因が野生生物の生存を脅かしているのか、その要因を科学的に解明する作業が欠かせないと報告された。ただ人口密度の高い日本で、過去の生態系をすべて復元することは現実的にほぼ不可能であるため、劣化した生物多様性を回復するには、どのような生態系を目指し、どの要素を回復・修復するのかという目標像の明確化と、そのための指標づくりが求められると指摘された。その上で、失われた氾濫原の機能を回復するには、瀬田川洗堰操作規則を始め、淀川大堰などの水位操作のあり方の再検討も不可欠であり、生物多様性保全の視点を、治水・利水、水質保全と同等の重みで評価、実現する仕組みを作り上げるための行政、専門家、市民参加のもとでの広範な議論が求められるとご講演された。琵琶湖とたんぼを結ぶ取り組みについて～針江浜うおじまプロジェクト～

(国土交通省琵琶湖河川事務所 守安邦弘氏)

琵琶湖岸の針江地区において、湖岸域からたんぼまでの連続性を確保するため、休耕田に魚が産卵するための導水路や魚道の設置、湖岸堤の陸側を活用した魚類が産卵生育できるビオトープづくりなどを、農業や河川管理の関係機関などが実施してきたと報告された。それらの活動を連携して実施していくため「琵琶湖とたんぼを結ぶ連絡協議会」を平成17年8月に設置し、それにより、情報交換や啓発活動として自然観察会を開催するなど関係者が一体となった取り組みを実施していることが報告された。

琵琶湖と農業と農薬～環境こだわり農業は琵琶湖への農薬流出を減らせるか～

(滋賀県立大学環境科学部 須戸 幹氏)

環境こだわり農業技術には、①農薬の流出率そのものを低減させる効果はあまり期待できないが、成分削減による散布量削減は可能であること、②水環境への流出特性は農薬によって異なるため、散布量の削減は必ずしも水環境への流出削減に結びつかないことが報告された。とくに、環境こだわり農業の実施基準は原体数の半減であるため、実際の農業現場ではより少ない原体数で効果が得られる製剤の使用が増加する結果、特定の農薬製剤が集中して散布されることが指摘された。仮にその原体の水環境への流出特性が大きいと、かえって環境負荷の増大を招くことになり、この防止のためには、農薬の水環境中への流出性を予め予測し、それらを考慮した散布農薬製剤の選定が必須となると指摘された。

水のつながりは人のつながり～針江生水の郷委員会の取り組み～

(針江生水の郷委員会 山川 悟氏)

2004年4月にNHKハイビジョンスペシャルで放映された映像詩「里山・命めぐる水辺」の舞台になった美しい景色と生命の輝きに満ちた、滋賀県高島市新旭町針江という小さな静かな町での湧水を利用した里山の暮らしについて、多くの写真を用いながら活動の様子を紹介していただいた。その中で、都会の子供が里山の生活をとおして元気を取り戻す様子や、地域の活性化、住民の環境意識の向上などが報告された。本来、水環境が持つ価値を再認識させていただくとともに、これらの価値の評価が従来の水質指標のみでは表現されにくいものであることが示唆された。

見学会「見て聞いて学ぶ琵琶湖の保全・再生の今」

講演会の後、バスで琵琶湖に移動し、船から自然再生現場を観察していただいた。新旭町では「自然と人がともに息づく町」として、きれいな水を中心に、人々が自然と共存しながら暮らす様子を見ることができた。とくに針江地区では、地下水が豊富に湧き出し、古くからある家には、川端（かばた）と呼ばれる水仕事専用の施設がのこされ、それを今も生活のために利用している家庭が数多くあった。今回の見学会では、実際にここに暮らす方のお話を伺いながら、散策することで、水環境と人々の暮らしの関わりを学ぶことができた。今回、講演を快く引き受けていただいた演者の皆様、会場や見学会に足を運んでいただいた多くの参加者の皆様に心からお礼申し上げます。

(京都大学 田中周平)